

戦争を通して平和を語るができるのだろうか^{*1}

ソギョイボ
コ・ドンミン(西帰浦女子高等学校)

はじめに

「この巨大都市に私たちだけが残った。この巨大な空虚を見ているのも私一人だけだった。これから迫ってくる未知の事態に遭遇するのも私たちだけだ。どうすれば対処できるのか？ いっそのこと、私たちも消滅できるものならばそうしたかった。

そのときふと、行き止まりの路地に追いこまれた逃亡者がぐるりと振り返ったみたいに、一瞬の内に思考の転換が起きた。私だけが知っている光景なのだから、に何か意味があるのではないか。私たちだけがこの地に居残ることになったのは、たくさんの偶発的な災いが積み重なってこうなったのだ。そうだ。私だけが見る光景であるなら、そのことを明らかにする責任がきつとある。それこそ偶発的な災いに対する正当な復讐だ。明らかにする責任は巨大な空虚のことだけではない。虫けら扱いされた時間間も証言しなくては。そうしてこそ虫けらからようやく抜け出すことができるはずだ。

このことはいつか書くことになるだろうと感じた。その予感が恐怖を追いやった^{*2}。

韓国戦争勃発直後のソウル外に避難できなかった朴婉緒作家はソウル収復以後「アカ」、「附逆者」に追いやられて受難を味わう。作家の叔父は町内の人々に「人民軍附逆者」として告発され裁判で死刑を宣告された。作家(自身一記者)もやはり町内の青年たちに「アカのあま」と呼ばれて獣や虫けら扱いされる。彼女はソウル収復直後、附逆者に追いやられて恥辱を経験した瞬間を「虫けらの時間」と記憶し、夜ごとこの時間を記憶から消すために首を狂ったように振り、あがいたと回顧する。中国軍の参戦以後、ソウルを再び奪われる危機に直面したとき作家と家族は避難を決心したが、父親の足の負傷で結局ソウルに残ることになる。作家の母親は附逆者の疑惑を抜け出すためには「避難するふり」でもしなければならぬと言ひ、家族を連れて幼い時期に居住していた岬底洞に向けて発つ。ソウル一帯がひと目で見下ろせる岬底洞で作家は空っぽの都市の巨大な空虚を一人で眺め、本人が経験したことを「明らかにする責任」があるという事実を悟る。彼女は「虫けらの時間」を記憶から消さず、虫けら(の運命一記者)から抜け出すためにこの時間を明らかにすると誓う。

戦争が終わって40年余りが流れた後、朴婉緒作家は本人の自伝的小説である『あんなにあった^{すいぼ}酸菓をだれがみんな食べたのか』を執筆し、戦争当時みじめだった「虫けらの時間」を生々しく証言する。彼女の証言にはどのような意味があるだろうか。小説家チョン・イヒョンは、朴婉緒の小説を分析しつつ証言は「個人的利益を目的とせず、社会的責任を持ち、自分が知っている事実を公開的に知らせるという宣言」だと述べた。彼女は告白が心深く隠されていたものを「個人的な次元」で率直に明らかにしようとするれば、証言は「社会的責任」を持って行う行為だと強調する。彼女の分析によれば、朴婉緒作家の小説は「自分だけ」の傷を告白するのを越えて「私たちすべて」の傷を社会に証言する作品である^{*3}。

朴婉緒作家の小説を読んで私の韓国戦争授業をふり返った。これまで韓国戦争を教えつつ私はどれくらい多くの人の証言を授業に盛り込んだらうか。戦争責任の所在を明らかにしたり、「仁川上陸作戦」^{インチョン}のような劇的な場面を描写するために戦争捕虜、避難民、参戦女性、民間人虐殺遺族の証言に目を背けなかつたらうか。授業進度に追われて戦争の原因と過程だけをあたふたと説明し、戦争を経験したさまざまな人々の声は省略したまま玉虫色で過ぎて

*1 本稿は、全国歴史教師の会で主管した「2023年下半期職務研修」に載った原稿を小幅に修正・作成し、二回にわたって『歴史教育』会報に連載する予定である。

*2 朴婉緒^{パクワンソ}『あんなにあった^{すいぼ}酸菓をだれがみんな食べたのか』熊津知識ハウス、2021年、311～312ページ。邦題は、(真野保久・朴景恩・李正福訳)『あんなにあった酸菓をだれがみんな食べたのか／あの山は本当にそこにあったのか』影書房、2023年。[ただし、引用文は朴婉緒の文章ではなく、金允植ソウル大名譽教授が書いた「解説」の一文である。]

*3 チョン・イヒョン「今朴婉緒を読み直して 酸菓のない世界でようやく一証言としての文を書くこと、ある出師の表に関して」、『あんなにあった酸菓をだれがみんな食べたのか』、346～348ページ。

いきはしなかつただろうか。朴婉緒作家が戦争当時経験した「虫けらの時間」を忘れず、証言を通じて「社会的責務」を尽くしたように、後代に生まれた歴史教師はその証言を授業に反映して社会的責任を遂行しなければならないのではないだろうか。

このような省察を基に今年の韓国戦争の授業を準備したとき、戦争を経験したさまざまな存在の声を反映しようと努力した。18歳で海兵隊4期として入隊して戦争の残酷さを味わった後、若い人々に「戦争は起こしてはならない」と強調したカン・ギョアおばあさんの声。村共同体でくり広げられた報復虐殺以後、沈黙を守って最近「容赦と和解の慰霊塔」を建て、戦争の傷を治癒するために努力している鳩林村の人々の話。イギリスのエリート女性で本人の地位が危険になる恐れがあっても北韓で発生した戦時性暴力を勇気を奮って告発した平和運動家モニカ・フェルトンの声に耳を傾け、平和と信頼、勇気の価値を語ろうと思った。

歴史教育にも「アジェンダ・キーピング」が必要だ

チェジュ 済州四・三や五・一八民主化運動など現代史の大きな事件を授業するときにはいつも悩みとなる地点がある。どの内容をどれくらい扱わなければならないか。教科書に叙述された内容だけ授業のときに扱えば終わりか。時には進度に迫られて教科書にある内容さえ教えることができないときもあるが、心の片隅には国家暴力事件や民主化運動など普段関心があったテーマを深く語ってみたいという考えがあった。そうこうしている間に孫石熙前アンカーが書いた『場面』を読んだ。この本で孫石熙アンカーは、ジャーナリズムの一方論として「アジェンダ・キーピング Agenda Keeping」を言う。伝統的なメディアの機能が「議題設定機能 Agenda Setting」にあるとすれば、もはやメディアが単に議題を立てるのに留まらず、その議題を着実に守ることによって市民社会に善なる寄与をすることができだろうと彼は主張する^{*4}。彼はMBCからJTBCに移って以後、本人が主張した「アジェンダ・キーピング」を懸命に実践してきた。500日を超えて続いたJTBCのセウォル号現場報道はおそらくアジェンダ・キーピングの代表的事例であろう。

この本を読んで歴史教育にも「アジェンダ・キーピング」が必要だと考えた。『韓国史』教科書に数多くの歴史的事実があってもその事実は試験を一度過ぎれば、すぐに学生たちの記憶から揮発されることが多い。毎日数多くのニュースが氾濫する時代にメディアが社会的に重要な議題を着実に守らなければならないように、歴史授業でもある歴史的事実は学生たちの記憶から消えないよう着実に守るべき必要があるのではないだろうか。どの歴史的事実が教育的に重要かは論争の余地が多いが、停戦協定70周年を迎えて今年[2023年]は韓国戦争をともに記憶する価値があるテーマだと考えた。1953年7月27日に戦争の銃声は一時的に止まったが、依然として私たちは戦争を完全に終わらせることができず、停戦状態に留まっている。なぜ私たちは戦争を終わらせることができなかつたのだろうか。戦争を終わらせることができなかつた代償として私たちはどのような結果に耐えなければならなかつたのだろうか。戦争を終結させ、平和体制をつくることはなぜ重要なのだろうか。今後引き続き韓半島で生きていく学生たちが韓国戦争を勉強し、真剣に悩むべき質問だと考え、この質問にある程度答えるためには韓国戦争を長い呼吸で勉強しなければならないと考えた。

長い呼吸で韓国戦争の社会史を語る

2学期始業以後、西帰浦女子高1学年の学生たちを対象に放課後授業を開設した。正規教育課程で韓国戦争をテーマに多くの時間を割くことは難しいので放課後の授業で長い呼吸で韓国戦争を扱おうと思った。西帰浦女子高は放課後授業をブロック・タイム制で100分ずつ運営している。2学期の間に計9次時(18時間)の授業時数を活用することができたが、「韓国戦争と南北関係」をテーマに授業計画を構想し、学生たちを募集した。1学年の学生25人が放課後授業を申し込んだし、オリエンテーションの時間に今後学ぶ授業テーマを次のように案内した。

<表1>韓国戦争の放課後授業テーマ

時	授業テーマ	核心質問	関連映像および映画

*4 孫石熙『場面』、創批、2021年、9～10ページ。

1	解放と分断の現代史	韓半島分断を防ぐことはできなかったのだろうか	〈鋼鉄の雨〉
2	韓国戦争はなぜ起きたのだろうか	平和のために私たちが戦争で注目すべき話は何だろうか	〈高地戦〉 〈カン・ギロアおばあさんのインタビュー〉
3	村に及んだ韓国戦争	戦争は私たちが暮らす共同体をどう変化させたのだろうか	〈太極旗を翻して〉 〈ウェルカム・トゥー・トンマッソル〉
4	戦争が襲った個人の生	平凡な個人の生は戦争を通してどのように屈折し、よじれるようになったのだろうか	〈スウィング・キッズ〉 〈アイラー戦争の娘〉
5	戦争は女の顔をしていない	なぜ女性の戦争経験に注目しなくてはならないのだろうか	〈参戦女性インタビュー〉 〈アイキャンスピーク〉
6~8	戦争の記憶と記念	私たちは戦争をどう記念しなければならないだろうか [学生の活動]停戦協定70周年記念物製作	
9	南北関係から見る韓半島の平和	韓半島は「平和の土地」になることができるだろうか	〈共同警備区域JSA〉

授業テーマは最近国内で活発に論議されている「韓国戦争社会史」研究の問題意識を反映して選定した。脱冷戦以後の韓国戦争研究は「戦争の起源と勃発」を分析することを越えて戦争の展開過程を「軍事史」、「政治・外交史」、「社会史」の観点からさまざまに眺望している。特に、最近では国内研究者を中心に韓国戦争の社会史研究が活発に行われているが、口述史研究の方法論の導入とともに民間人虐殺、南北韓の占領政策、女性の戦争経験、村の戦争被害など非常に多様なテーマが論議されている^{*5}。韓国戦争の研究者たちはもはや単純に戦争の責任が誰にあるのか明らかにすることを越えて「平和の観点」から戦争を省察するためのさまざまな試みを継続している。

教育課程が数回改正されつつ高等学校『韓国史』教科書に韓国戦争社会史研究の成果が少しずつ反映されている。本文には簡単に言及されているとしても、探求活動の資料で「国民保導連盟事件」、「北韓軍の人民裁判」、「老斤里事件」などの内容が圧縮的に提示されている(にすぎない一訳者)。しかし、教科書の紙面の限界上多くの資料が提供されない状態であり、叙述の焦点もやはり戦争の原因と展開過程に主に合わせられている。教育課程や教科書のこのような限界を補完するために、授業テーマに韓国戦争の社会史研究の成果を最大限反映しようと思った。具体的に村の戦争経験、参戦女性の話、戦争捕虜の生、戦時性暴力問題などを授業テーマに選定して韓国戦争がわが社会に残した意味は何か語ろうと思った。

映画を通じて韓国戦争に接近する

新しい学期が始まったとき西帰浦女子高1学年219人の学生を対象に歴史知識をどこで知ったのか尋ねたことがある。質問の結果は次のように出てきた。

厳密な研究結果ではないが、西帰浦女子高の学生たちが授業時間の他にユーチューブや歴史ドラマ・映画などの歴史コンテンツを通じて歴史知識に接していることがわかった。個人的な経験によっても、授業時間に歴史知識を教師が説明することによっても、映画で再現した場面を視聴するとき学生たちがさらに没頭する姿をしばしば見ることができた。このような経験を基に放課後授業で韓国戦争を教えるとき歴史映画をたくさん活用しようと思った。映画を活用した授業は初めてだが、2000年代初期に封切られた〈太極旗を翻して〉[邦題は〈ブラザーフード〉]から最近製作された〈スウィング・キッズ〉まで韓国戦争関連映画は非常に多く、放課後の授業時間も100分と豊かなので試みる価値

*5 キム・テウ「韓国戦争研究の動向の変化と課題1950～2015」、『韓国史学史学報』32号、2015年。

があると考えた。

授業を準備しつつさまざまな歴史映画を探してみたが、どのような映画を学生たちといっしょに鑑賞すべきかかなり悩んだ。このような悩みは基本的に歴史映画が政治的に解釈される問題と関連がある。映画<国際市場>[邦題は、<国際市場で逢いましょう>]が封切りられたとき「朴正熙時代を美化している」という批判があったが、「壮年層以上、いわゆる『父の世代』の献身に共感できる映画」という評価も共存した。朴槿恵政府のとき「文化芸術界ブラックリスト」論難が続きつつ歴史映画をめぐって「歴史戦争」を越えて「映画を通した歴史戦争」までくり広げられているという評価も出てきた*7。

韓国戦争の映画も同様である。映画の中で韓国戦争を見る観点は大きく三つに区分することができる。第一は国家に対する軍人の献身と忠誠心を強調する観点である。代表的な映画に、学徒兵の献身を強調した<戦火の中へ>や、マッカーサーと国軍の物語を扱った<仁川上陸作戦>[邦題は、<オペレーション・クロマイト>]がある。第二は戦争の狂気と残酷性を告発する観点である。代表的な映画に<太極旗を翻して>があるが、この映画は戦争の惨めさを正面から扱いつつ平和の重要性を力説している。第三は南北韓の敵対感を解体し、和解の過程を強調する観点である。代表的な映画にトンマッコルの村の平和を守るために南北の軍人が和合する場面を扱った<ウェルカム・トゥー・トンマッコル>[邦題は、<トンマッコルへようこそ>]がある*8。

映画<仁川上陸作戦>が封切られたとき、当時の政権次元で大々的な広報があったが、多数の映画評論家は「過度に単純な善悪二分法の構図」という問題点を指摘し、映画の叙事が「反共主義」と「英雄主義」で満たされていると批判した。この論難を見つつ韓国戦争映画を授業で扱うとき第二と第三の観点が反映された映画に注目すべきだと考えた。第一の観点の映画が意味がないわけではない。映画<戦火の中へ>のように、学徒兵の献身を記憶し、<仁川上陸作戦>のようにマッカーサーの活躍像を照明する映画も必要だと思う。ただし戦争を勉強する本質的な目的が平和を省察するところにあるとすれば、相手に対する敵対感を育て、愛国心を鼓吹する物語よりも戦争の悲劇を通じて平和の大切さを悟り、敵との対話を通じて葛藤を平和的に解決する可能性がある事実を見せてくれる映画のほうが授業の趣旨に適合すると考えた(学生たちとともに鑑賞した映画は<表1>に提示されている)。

歴史を綴ることを通じて考えを表現する

韓国戦争関連映画を選定して以後、本格的に放課後授業を運営した。授業課程は①授業テーマについての教師の講義、②映画鑑賞およびワークシート作成*9、③学生たちが綴る活動の順に展開した。歴史を綴る活動は、授業テーマと関連した核心質問に学生たちの考えを作成する方法で進めた。

ここでは授業テーマ別に学生たちに講義した内容を案内し、授業の核心質問に対する学生たちの回答を紹介しようと思う。

<表2>西帰浦女子高1学年学生の歴史知識の受容経路*6

*質問 みなさんが今知っている歴史知識はどのように知ったのでしょうか。歴史知識をもっとも多く得たものを二つ選んでください。

応答	応答数	比率
友だちや大人たちの話	35	8%
歴史の授業時間、歴史教科書	195	44.5%
歴史小説やドラマ、映画	82	18.7%
ユーチューブYoutube	81	18.5%
知識百科などインターネットを利用した検索	13	3%
教科書以外の歴史の本	32	7.3%

*6 歴史教育研究所で製作した「2016中等歴史意識調査質問用紙」を参考にして学生たちの歴史知識受容経路を調査した(歴史教育研究所『歴史意識調査、歴史教育の未来を問う』ヒューマニスト、2020年)。

*7 チョン・ジョンファン『歴史戦争』と歴史映画戦争』、『歴史批評』117号、2016年、416ページ。

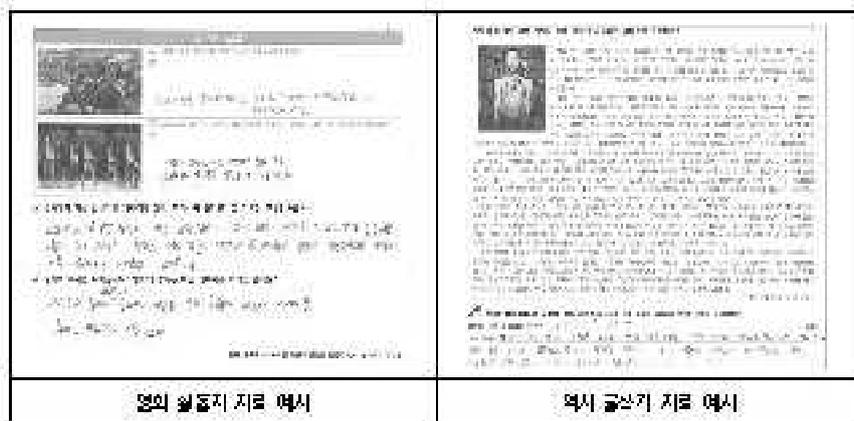
*8 キム・ソンオクほか「平和・統一教育教授—学習資料(歴史)」、教育部・韓国教育開発院、2019年、97～98ページ。

*9 映画を活用した授業を準備しつつ全国歴史教師の会ホームページに上がっていたチャ・ギョンホ先生の映画ワークシートを多く参考にした。大事な資料を提供されたチャ・ギョンホ先生に感謝の言葉を伝える。

テーマ1 解放と分断の現代史

授業の最初の時間に私たちがなぜ分断され、分断を防ぐ機会がなかったのか語ろうとした。私たちが分断を防げたとすれば戦争の悲劇もやはり十分に避けることができたため、解放以後の分断の過程をふり返ることが重要だと考えた。これまでに進められてきた分断に関する研究は、分断の原因が外部にあるのか、内部にあるのかに分かれていた。すなわち、分断の原因が冷戦時代のアメリカとソ連の政策にあるのか、国内政治勢力間の葛藤と分裂にあったかが核心論議事項だった^{*10}。

歴史教科書はほとんどの38度線の形成とともに米ソの分割占領によって韓半島の分断が始まったという



観点を反映している。ところが、歴史学者鄭秉峻は「信託統治論争」以後、ソウルと平壤の政治指導者が平和的に分断問題を解決しようと試みなかったと言及し、「21世紀の韩国人は20世紀の政治指導者に分断が本当に仕方ないことであったか、あなたたちの責任はないのか問わなければならない」^{*11}と強調した。このような指摘を授業に反映して学生たちに左右合作運動とオーストリアの統一事例を語り、分断は本当に必然的なものだったか、分断を防ぐ機会がなかったのか、当時の政治指導者ははたして責任ある姿を見せたのかふり返ろうと強調した。授業の核心質問として韓半島が分断される過程でもっとも惜しい瞬間がいつなのか尋ねると、学生たちは次のように答えた。

学生1 韓半島が分断される過程でもっとも惜しい瞬間は、左右合作運動が失敗したことです。左右合作運動は分断を防げる出発点になることができた機会でした。左右合作運動を通じて左右代表勢力の対話ができたとすれば戦争のような悲劇が起きなかつたらう。わが国の分断の歴史の接着剤のような役割となるかもしれなかつた左右合作運動が失敗したのは非常に惜しいことだ。

学生2 韓半島が分断される過程でもっとも惜しい瞬間は、その分断を防げた点だ。なぜなら韓半島が分断された後に六・二五戦争も起き、北韓、南韓国もいつ戦争が起きるか分からないと恐れながら暮らしていたからだ。そして、現在国防にかけのお金はさらに多いと言えるから、そのとき分断されるのを指導者が防いでいたらどうだったか惜しい気がする。

学生3 韓半島が分断される過程でもっとも惜しい瞬間は、ほとんど対話をせず壁をつくってしまった瞬間だ。十分に対話によって分断ではなく他の選択肢を捉えることができた。ところが、互いを避け、拒否しつつその選択肢の幅を減らしていった。今のような結果となったとしても努力をしていればという気がして惜しかった。

第一の授業テーマを終えつつ2022年の大統領選挙以後ますます強くなっている韓国の「政治両極化」指標を提示し、政治的見解が他人と対語り、妥協する文化が消えているようだと語りた。普段歴史はいつも「実践的な学問」だと考えている。そのため分断の過程を学びつつ現在の私たちが得ることができる示唆は何なのか語ろうと思った。左であれ右であれ、極端な主張をする政治指導者が分断を主導したと言及し、異なる意見を持っている人々の見解を聞き、妥協することがわが社会にも必要だと語り、授業を終えた。

テーマ2 韓国戦争はなぜ起きたのだろうか

第二のテーマを授業したときは、韓国戦争についての基礎的な理解が必要だと判断して戦争勃発の背景と展開過程を重点的に扱った。歴史学者朴泰均は、既存の韓国戦争展開過程についての叙述がたいい「成功」の過程としか描かれてこなかつたと指摘し、認識の転換を通じて韓国戦争初期の展開過程を「失敗」の連続過程と見るよう提

^{*10} 朴泰均「分断原因論争」、『論争で読む韓国現代史』メディアチメディア、2019年。

^{*11} 鄭秉峻「解放と分断の現代史を読み直す」、『争点韓国史』現代編、創批、2017年。

案している*12。このような観点を授業に反映して韓国戦争の展開過程を「失敗の連続」と描写した。第一の失敗は北韓軍の作戦計画である。北韓指導部は戦争が勃発すれば38度線以南の人々が北韓軍を歓迎する蜂起が起きるだろうと予想したが、実際そうしことは起こらなかった。また、北韓軍は速戦即決で戦争を終わらせるという計画と違ってソウルで3日間という時間を浪費しつつ米軍が参戦できる時間を与えてしまった。以後、国軍は米軍とともに洛東江一帯で防御作戦を遂行し、仁川上陸作戦を通じてソウルを再び奪還することができた。

第二の失敗はアメリカの38度線以北への北進である。戦争勃発直後に採択された国連決議は国連軍結成の目的を北韓軍を38度線以北に追い出し、以前の国境線を回復することだと規定している。当時のアメリカ政府高位官吏たちは、これを根拠に国連軍が38度線を越えて北進することは国連決議を越える行動だとし、国連軍の北進に反対した。しかし、トルーマン大統領は米軍の38度線突破を承認し、マッカーサーは国境地帯には韓国軍だけ派遣せよという大統領の指示を無視し、すべての国連軍を鴨緑江まで進撃させた。その結果、大規模な中国軍が韓国戦争に派兵され、北進を敢行した韓国軍と国連軍は再び38度線以南に後退するほかなかった。このように韓国戦争における失敗の過程を強調することによって政治指導者が戦争を通してその願いを成功裏に得ることができるという信仰に警戒心を持たせようと思った。

次に、戦争の英雄叙事によって遮られた物語に注目した。今回の授業テーマで学生たちとともに鑑賞した映画<高地戦>[邦題は、<高地戦 THE FRONT LINE>]を見てみると、戦争の悲劇を描写する台詞がかなり出てくる。ある学生は映画の中の名台詞としてシン・イリョン(俳優李濟勲)が「われわれはアカと戦うのではなく戦争と戦うんだ」と語る場面を選定しつつその理由を次のように明らかにした。

「彼らは(戦争で)望んでいなかった犠牲をつくることも味わったりする。普段のように友だちと遊んでいた学生たちが、家で暖かいご飯を食べた家長が、戦争で生と命を失ったからだ。」

韓国戦争は数多くの戦争英雄を誕生させたが、休戦ライン近くでは一つの小さな高地を占有するために無辜の人々の命が犠牲になった。学生の話のように「普段のように友だちと遊んでいた学生たちが」、「家で暖かいご飯を食べた家長が」惨めな死を迎えた。映画<高地戦>を学生たちいっしょに鑑賞し、人望ある戦争英雄の代わりに戦う理由もわからないまま死んでいった名もなき人々の話を交わそうと思った。

仁川上陸作戦の成功叙事で遮られた物語にも注目した。幼い頃からたくさん接してきたからかわからないが、学生たちは仁川上陸作戦についてよく知っていた。マッカーサーを知らない学生もいなかった。ところが、作戦当時米軍の無差別爆撃で犠牲になった月尾島住民の物語はみな知らなかった。仁川上陸作戦が進められている間にアメリカ海兵隊の爆撃機の編隊は北韓砲兵部隊の掩蔽物を燃やすために月尾島に「無力化作戦」を展開した。この爆撃によって30世帯余りのうち相当数が抹殺された、100人余りの住民が虐殺された。現場で月尾島住民の姿を写真で残したイギリスの従軍写真家は当時の状況を次のように表現した。「米軍は民間人を『私たち(の側一訳者)』として確実に識別できずに疑い、無差別に破壊していた『圧倒的破壊者』だが、同時に負傷を治療してくれ、食べ物もくれ、住居地を用意する『崇高な救援者』でもあった」*13。

また、仁川上陸作戦の成功のために展開された「長沙上陸作戦」に10代の学徒兵772人が参戦したが、彼らを乗せた汶山号が台風遭いつつ学徒兵60人余りがまともに戦闘もできずに死亡することもあった。月尾島の民間人の犠牲と長沙上陸作戦に参加した学徒兵の死は仁川上陸作戦の成功のための避けられない死だったのだろうか。むしろ彼らの犠牲が戦争を通じてぶつかるようになる残酷な現実をしっかりと聞かせるのではないか。このような問題意識を反映して授業の核心質問として平和のために私たちが戦争で注目すべき物語は何か尋ねた。学生たちの回答は次のとおりだった。

学生1 平和のために私たちが戦争で注目すべきは被害者の話だ。その理由は、平和のためなら戦争が起きてはいけないことなのに、仁川上陸作戦を指揮したマッカーサー将軍や戦場で勝ったことにだけ注目すれば、戦争の肯定的な面を植え付けて再び戦争発生の危険があるときに戦争に同意する人が生じて平和が壊れるかもしれないからだ。もちろん、だからと言ってソウルを取り戻したマッカーサー将軍、その他にも数多くの戦場に勝った偉人に注目してはならないというわけでは

*12 朴泰均『韓国戦争』本とともに、2005年。

*13 康誠賢『小さな「韓国戦争」たち』青い歴史、2021年、103～107ページ。

ない。ただし、すでに多くの時間記憶され、追慕した英雄よりも、戦争を味わった私たちのような一般人、被害者の話を記憶し、賛えれば戦争の痛みを知り、もう少し平和に過ごすことができるのではないか。

学生2 平和のために私たちが戦争で注目すべき話は美しい結末のために埋もれた悲劇的な犠牲だ。もちろん米軍の助けによってもっと大きな犠牲を防ぐことができたことは正しい。しかし、生じなくてもよかった犠牲にもっと注目する必要がある。常に戦争は多くの犠牲を生む。なおさら仕方のない犠牲だと考えるのではなく、この犠牲が必要だったかを考え、批判的に見なければならぬと考える。私たちは美しい結末によって遮られた犠牲を忘れてはならない。

学生3 平和のために私たちが戦争で注目すべきは、戦争によって傷を負った人々の話だ。私たちが小さいとき聞いた英雄は、人々を危険から助ける人だった。だが、戦争の中で英雄と呼ばれる人々は戦争をいっそう深化させ、人々をいっそう危険に追い込んだ。私たちが彼らを記憶することによって得ることができる教訓は、勝利の喜び、「勇猛さ」それだけだ。これは戦争は再び起きてはならないということを美化させる行為と見ることができる。したがって、私たちは戦争によって傷を負った人々と彼らの話を記憶し、このような痛みが再び繰り返されてはならないという事実を心の奥深く刻まなければならない。

授業の最後に軍で開催した仁川上陸作戦再現行事と米軍の爆撃で犠牲になった月尾島の住民を賛える慰霊碑をともに見せ、語りた。平和の観点から戦争を再現する行事が正当化されるのか。戦争中に発生した民間人犠牲に耳をさらに傾けなければならないのではないのか。歴史社会学者康誠賢カンソンヒョンの言葉のように「戦争祭の代わりに米軍爆撃による地域被害者慰霊祭をともにし、一歩進んで分断敵対の海が平和交流の海になることができるように新しい平和祭を企画する」^{*14}想像力が私たちに必要だと考える。

テーマ3 村に及んだ韓国戦争

済州島涯月には「下貴里」という所がある。この村は日帝強占期に独立運動家を多く輩出した地域で、解放以後抗日運動家出身が村の自治を主導し、済州四・三の発端となった1947年の三・一節記念行事にも積極的に参加した村だった。そうしている間に1948年に四・三が勃発すると、村に悲劇が訪れた。村で教育事業を展開していた学生や青年らは軍・警討伐隊を避けて(村を一沢者)離れなければならない、彼らが身を隠したという理由でいわれない家族が命を失うこともあった。1948年12月30日には山に入った武装隊が村を襲撃して住民たちを殺す報復虐殺が起きることもあった。下貴で発生した虐殺は非常に極悪非道なやり方で行われたが、軍警が簡単に銃殺できる場合でも村の住民たちを動員して自身の隣人たちを直接殺すようにした。虐殺劇に村の人々を共犯として参加させたのである。以後、村共同体は加害者と犠牲者が絡まったまま瓦解してしまった。

初めて下貴里の事例に接したとき大きな衝撃を受けた。四・三はこの村にどれくらい深い傷痕を残したかも、虐殺の狂風で生存した人々は共同体内でどのような生を生きていったかも、くり返し語りた。今年、韓国戦争の授業を準備しつつ歴史学者朴賛勝パクチャンソンが著述した『村に及んだ韓国戦争』を読んだ。本を読むと韓国戦争期に全国の多くの村々に下貴里と類似の事例があった事実を知るようになった。朴賛勝の研究によれば、韓国戦争以前の地域社会は両班・平民の身分葛藤、地主・小作人の階級葛藤、親族内部の葛藤、村々の葛藤、キリスト教徒と社会主義者の理念葛藤など「複合的な葛藤構造」を形成していたが、戦争が勃発した後、村の葛藤構造に国家権力が介入しつつ大規模な虐殺が発生した^{*15}。この虐殺に村の住民たちが積極的に参加しつつ数多くの村共同体が崩壊し、その影響は今も続いている。

韓国戦争期の村でくり広げられた民間人虐殺を勉強し、第三の授業テーマとして戦争が共同体に残した痕跡について語ろうと思った。韓国戦争は南北が上がり下がりする戦争、すなわち「鋸で引く戦争」になったため被害者が加害者となり、再び加害者が被害者となる状況が多かった。村の住民が虐殺に参加して軍人より民間人の被害のほうが大きく、戦争以後共同体内の信頼は崩れてしまった。授業時間に「戦時附逆者処罰」、「国民保導連盟事件」、「村内虐殺」など民間人虐殺の事例を語り、戦争が共同体にどのような痕跡を残したと思うか学生たちに尋ねた。学生たちの回答は次のとおりだった。

学生1 戦争が共同体に残した痕跡は社会に対する不信だと思う。そう考えた理由は、同じ村に暮らし信じていた人々が

*14 康誠賢、前掲書、2021年、108ページ。

*15 朴賛勝『村に及んだ韓国戦争』ヒューマニスト、2010年、56ページ。

一瞬にして自分の家族を死に追い込み、自分が生きるためには他人を死地に追い込まなければならなかったため、互いに対する信頼が消えるほかなかったと思う。

学生2 戦争が共同体に残した痕跡は互いに向かう疑いと憎しみの歴史だ。戦争は大きな犠牲をつくる。その中では民間人の犠牲がもっとも多かっただろう。さらには互いに銃口を押しこむこともあり、昨日の友が今日の敵になるのが一度や二度ではなかっただろう。ただ個人的な感情で虐殺される人々を見て、加害者はどんな考えがあったのだろうか。明らかなのは彼らの中には根が深い暴力性と憎しみが打ち込まれることになったことだ。

学生3 戦争が共同体に残した痕跡は私たちの記憶の中の傷だ。戦争の痕跡としては目で見ることができる場所、残っている文章がある。ところが、私たちは戦争によって生じた心の傷に集中しなければならない。他の痕跡よりも深く残っているこの傷を消すために努力しなければならない。

韓国戦争期の民間人虐殺を扱い、虐殺を防ぐ機会はなかったのかもとに語ろうと思った。仮想の話だが、映画〈ウェルカム・トゥ・トンマッコル〉をいっしょに鑑賞し、トンマッコルの平和を守るために国軍、人民軍、米軍が一つとなって作戦をくり広げる場面が象徴する意味は何か、学生たちに尋ねた。ある学生はこの場面に「戦争の中でも人々の心の深いところには善良な心が隠れている」という意味があると語り、映画監督がこの映画を通じて「戦争は恐ろしく、残酷なものだが、その中でも人間らしい行動を選択する人々がいた」事実を語ろうとしたと分析した。

映画を見た後で実際に虐殺を防いだ事例を紹介した。チュンブクヨンドンクンヨンフア 忠北永同郡竜化支署のイソフヂン 李燮晋主任は永同警察署の保導連盟員招集と移送指示を拒否して40人余りを生かした^{*16}。済州島城山浦警察署のソンサンボ 文亨淳署長は虐殺を督促する海兵隊情報参謀の命令書に対して「不当なので不履行」という文章を送って大量虐殺を拒否したりした。村内でも虐殺を防ぎ、平和を守った事例があった。解放直後左翼勢力が強くと呼ばれたある村は、北朝鮮軍占領期に「愛国の村」と言及され、戦争動員に積極的に乗り出すことになった。ところが、ソウル収復以後人民軍が退却してこの村の元老は村全体がまるごと敵の同調者と見なされないか憂えた。実際にある日棍棒を持った隣村の青年たちが村に押しかけてきた。虐殺がくり広げられる危機に直面したとき隣村の大人一人がはあはあ言いながら駆け付け「自分たちの村とお前たちの村は血が混ざっている」と言って報復虐殺の悲劇を防いだ。「血が混ざっている」という言葉で人々を生かしたというエピソードは今でもモスクワ村で大切に記憶されている^{*17}。こうした事例を通じて大規模な犠牲が仕方のない状況ではなく、暴力構造の中でも異なる可能性や代案を模索する可能性があった点を学生たちに語りたかった。

戦争が終わった後、村の人々が共同体を復元するために努力した事例も語った。戦争直後左翼勢力が強かった村は「アカの村」と烙印を押され、長い間息を殺して生きるほかなかった。一部の村は附逆者の家屋〔家族の誤りか〕を村から追放することもあった。1987年の民主化以後、過去事真相糾明が少しずつ行われつつ村の人々は沈黙を破って口を開き始めた。そして、共同体を復元するために行動した。下貴里の人々は1990年に下貴発展委員会を構成し、村で死者を一カ所で祀るとによって生きている人間の平和的共存を追求しようとした。そうしてつくられた所が「英慕園」である。英慕園には名前が異なる三つの石碑がある。一番左側にある〈為国節死英顕碑〉は下貴里出身の独立有功者を賛える石碑である。左側から二番目の〈護国英霊忠義碑〉は四・三や韓国戦争で命を落とした軍人を追慕する石碑である。右側の端にある〈四・三犠牲者刻銘碑〉には四・三当時軍・警討伐隊によって犠牲となった人々の名簿が彫られている。下貴里の人々は武装隊によって虐殺された人と討伐隊によって犠牲となった人をそれぞれ異なる石碑に刻んだが、彼らをみな一同に祀ることによって三者の和解を追求した。〈四・三犠牲者慰霊碑〉には、下貴里住民たちの意志が次のように刻まれている。

「過ぎ去った歳月をふり返るとみなが犠牲者なのでみなが許すという意でみながともにこの石碑を立てたので、死せる者はぜひ目を閉じ、生ける者は互いに手を握りなさい。今やようやく限らない悲しみの地に限らない涙で限らない和解の言葉を刻むため、去る50年余りが長く恨めしくとも今から来たる日々のほうが長く明るいことを信じることにしよう。だからこの石の前ではこれ以上怨も恨も語るのをやめよう」。

*16 キム・サンスクほか『韓国現代史と国家暴力』青い歴史、2019年、106～107ページ。

*17 権憲益『戦争と家族』創批、2020年、128～131ページ。

韓国戦争期に左翼と右翼の報復虐殺が深刻だった全羅南道靈岩の鳩林村の人々も沈黙を破り、2006年に犠牲者全体に対する追慕祭を捧げた。そして、村の人々がともに「容赦と和解の慰霊塔」を建設した後に次のような碑文を刻んだ。

「恨ハンの多いこの世で左や右に理由もなく、わけもわからず殺された君よ。加害者と被害者、君と私、古い区別は永遠に消え、美しい人々の香りだけが満ちています。決してつくることのできない君たちの塔名を容赦と和解の塔としたのでもはや私たちの一歩遅れた贖罪をはね除けず、月 出 山麓ウォルチュルサンで謹んでお眠りください」。

共同体を復元するため下貴里と鳩林村の人々の努力を学生たちに紹介した後、戦争で崩れた共同体の信頼を回復するために何が必要か質問した。学生たちが文章にした内容は次のとおりだった。

学生1 戦争で崩れた共同体の信頼胡服のために必要なものは痛い過去を記憶し、互いに連帯する気持ちで、より良い未来に進むことができるよう尊重する心だ。「みな忘れて新しく始めよう！」ではなく、私たちみな痛みを持っているので互いの痛みを認め、誤りは謝り、良くないことはくり返さないよに努力するならば、共同体の信頼を回復するのに大いに役立つと思う。

学生2 戦争で崩れた共同体の信頼回復のために必要なものは勇氣だ。まず自分がこうむった被害の事実を社会に知らせるために勇氣を出さなければならないと思う。そして、自分の周りの人々に信頼を持って彼らを信じようとする勇氣が必要だと思った。みな恐れに打ち勝って勇氣を出すならば、再び信頼を回復することができると思ったからだ。

学生3 戦争で崩れた共同体の信頼胡服のために必要なものは真実を探し、互いに理解することだ。まず互いの誤解を解き、真実を正し、互いを理解するならば崩れた共同体の信頼を回復することができるだろう。その例としては鳩林村があり、鳩林村の人々は誤りを忘却せず、再びくり返されないよう歴史に刻まなければならないという忠告を残した。

授業を終えつつ韓国社会の葛藤問題を語りた。朴賛勝は『村に及んだ韓国戦争』の序文で戦争以前の韓国社会が葛藤要素が非常に多い社会だったと言及し、韓国人がこのような葛藤を賢明に解決できず、韓国戦争期に激烈な衝突と反復的な虐殺が現れたと強調した。

そして、次のような問いを投げかけた。「今日私たちは南北の葛藤、韓国内の各社会集団の葛藤をはたしてどれくらい賢明に解いているだろうか、韓国社会は葛藤を対話と妥協で解くよりも依然として力で相手を屈服させることにならしているのではないか」*18。過去とは違った様相だが、韓国社会は依然として葛藤要素が多く、社会の葛藤指数もますます高まっている。韓国戦争期の村の中でくり広げられた「小さな戦争」をふり返り、葛藤を賢く解いていくことの重要性を省察しなければならないと考える。

おわりに

三つ目の授業テーマまでは国家と村の戦争経験を眺望しつつ戦争が私たちが生きる共同体をどのように変化させたかを核心内容として扱った。ある学生は、戦争が共同体に「互いを疑い、敵対する心を残した」と語り、「もし戦争がなく、みな私たちだけの『トンマッコル』をつくって生きるならばいつも平和ではないだろうか」という気がかりなことができた感想を言った。この学生の感想を聞いて共同体に根深い敵対感を残した戦争の経験を探しつつ平和な共同体をどのようにつくっていくべきなのかともに悩まなければならないと考えた。

次号では戦争捕虜、避難民、女性など平凡な個人の戦争経験を授業でどのように扱ったのか紹介しようと思う。それとともに学生たちが製作した「停戦協定70周年記念戦時物」を紹介し、私たちが戦争をどのように記憶し、記念すればよいのかも語る予定である。

*18 朴賛勝、前掲書、2010年、11ページ。